

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第29回

インドネシアで

第5回SSP同窓会開催

2024年12月21日に科学技術振興機構(JST)国際青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプログラム(SSP)」の参加者による第5回インドネシア同窓会が開催された。当日は106名の同窓生のほか、来賓も含めて総勢110名の参加があった。冒頭、正木靖駐インドネシア日本国特命全権大使が挨拶。挨拶の中で、正木氏は「SSPで2014年以降、3000人以上のインドネシア人学生が日本で科学技術を学び、現在の両国の友好関係に貢献していることに感銘を受けている」と述べた。さらにSSPは、科学技術における人材育成を継続するための重要なプログラムであるとし、「日本で得たノウハウ・経験を今後のインドネシアの発展および両国の関係強化に大いに生かして欲しい」と信じている」と結んだ。

その後、インドネシア国立研究革新庁(BRIN)のエディ・プトウラ副局長が登壇し、SSPはインドネシア人の優秀な人材の量と質を加速させる機会を提供していると、「これからのインドネシア若手人材が日本との協力強化を維持できるようSSP同窓生を支援していくことを約束する」と述べた。



正木駐インドネシア大使(右から3人目)をはじめとする来賓ら

●同窓生からの経験の共有

その後、同窓生3名からのSSPでの経験および将来の展望などが共有された。一人目の登壇者、ハサマディン大学看護学部学生であるクナワンさんは、2024年に来日し、横浜市立大学等でのプログラムに参加した。その経験から、学生間の異文化交流イノベーションと知識の共有、専門的ネットワークの構築の3つの大きな柱の重要性を感じ、これらを着実に遂行することで両国の教員および学生間での研究活動の促進が期待できると述べた。

二人目の登壇者であるKidumi(インドネシアのスタートアップ企業)のコンサルタント、ナディア・ナーサイダティナさんは、2023年のSSPでの経験を語った。日本で経験した環境問題の教育への取り組みやごみの再生利用の高度な技術について、インドネシアにおける若い世代の同問題の意識向上が必要であるとの見解を共有した。SSPでの経験が自信に繋がり、二つのプラットフォーム(CATALYZON(環境プラットフォーム)およびLAMPUNG SMALL STEPS(若者への教育ファンディングプラットフォーム)の共同創業者として)の活動を通じて女性のエンパ



経験や将来の展望を語る登壇者ら



106名の同窓生のほか、来賓含め総勢110名が参加したSSP同窓会。参加者全員で記念撮影



参加者間の交流が促進されたネットワーキング

ワームメントにも携わっていると語った。「自身の頭の中には複数のゴールがあり、また旅路ははじまったばかり」と結んだ。

三人目の登壇者である気象・気候・地球物理機構職員のラティ・プラセトゥラさんは、2019年にSSPにより海洋研究開発機構(JAMSTEC)を訪問した経験が、大気科学者としての自分のキャリアにどのように影響をもたらしたかを語った。「SSP参加時に局地的変動とその世界的な影響の予測能力を改善するため世界最大の諸島郡の天候・気候を観察することを目的としたYMCプログラムに参加し、その経験は博士課程に進むためのリサーチプロポーザルを確立するのに大変役立った」と述べた。また、「同プログラムと一緒に参加した参加者たちも、多くが日本をはじめとする各国で博士課程に進学した」と付け加えた。

● インフォメーションセッション

日本学生支援機構(JASSO)インドネシアより日本留学に関して具体的な手順の説明があった。またJSTさくらサイエンスプログラム推進本部からは、2024年度より開始した日ASEAN科学技術・イノベーション協働連携事業(NEXUS)の若手人材交流プログラム(Yitec)について情報が提供された。

● ネットワーキング

ネットワーキングでは、同窓会幹事のアルビンさんが進行を務め、アルファベットビンゴゲームを実施し、参加者同士がお互いについてよく知る契機となり、参加者間の交流が促進された。印象を聞かれた参加者からは「このイベントで皆と再会できたことを大変嬉しく思う」等のコメントがあった。最後には、「さくらサイエンス、We are One!」を皆で心一つにして唱和した。

当日参加した同窓生からは「とても楽しかった」「充実していた」とのフィードバックがあった。また、今後のイベントについては「ネットワーキングの時間をもっと長くしてほしい」「SSPで日本滞在中にインドネシア学生と交流した学生から印象なども聞いてみたい」「よりイノベティブなワークショップなどもあるとよい」などの意見も寄せられた。